

立原正秋

春の鐘

下卷

春の鐘

下
卷

立
原
正
秋

新潮社



はる
かね
春の鐘（下巻）

昭和五三年七月二〇日発行
昭和五三年二月五日六刷

定価九五〇円

著者 たち はる まさあき
立原正秋

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一 電話

業務部（〇三）二六六―五一―

編集部（〇三）二六六―五四―

千一六二 振替 東京四―八〇八

印刷所 株式会社金羊社

製本所 神田加藤製本

©Masaaki Tachihara 1978 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

◇ 目次

心猿

寒い夏

夏の影

落葉

秋篠の里

178 139 72 57 5

装
画
原
万
千
子

春
の
鐘
(下卷)

心 猿

休館日の朝の八時、多恵は、傘を持ってマンションの屋上にでてみた。鳴海はまだ睡っていた。奈良は雨で煙り、とりとめのない眺めだった。わずかに近くの西大寺の藁いらかがみおろせるだけだ。天野久一が奈良のどこに棲んでいるのかは知るよしもなかったが、近鉄奈良駅で彼を見かけていらい、多恵はそれから二度彼を見かけていた。最初に彼を駅で見かけたあの日の暮方、多恵は、なにか怖いものを視た気がし、駅の階段をおりる手前でひきかえし、タクシーで西大寺に帰った。買物もせず家に戻り、水道の栓をひねり水をのんだ。もしかしたら後をつけられたのではなからうか、とそっと窓から道路を見おろした。かつてはその男の妻だったのに、いまは気味がわるいとしか言いようがなかった。すこし気持が落ついてから、買物にでなければ、と考えながら、戸をあけたら天野久一が立っているような気がして軀が動かなかった。

そして鳴海が帰ってきた頃をみはからって鳴海の部屋に電話をした。

「すぐこちらにいらしてくださいますか」

「いまするか。どうしたんだ」

「わけはいらしてから話します」

そして鳴海がきてから、近鉄奈良駅でのことを話した。

「いやな話でしょう」

「そういう言い方はよくないよ」

「すみません。……買物をしていないのです。外にでるのが怖いのです」

「わかった。しかし、外にでるのが怖いというのは明日から困るだろう。とにかく今夜は外に食事にしよう」

鳴海は多恵をつれて〈門前〉に夕食をとりに行き、昼間、美術館の前に天野久一が立っていたことは家に戻ってから話した。

「危害を加えてくるような人ではないと思うが、気をつけるにこしたことはない」

「ここも知られていると思います。わたくしが電車で通勤していることを知っているのです。そうでなかったら、駅で待っているはずがないでしょう」

「それは考えられるな」

「明日からバスでかけようと思います」

「そうしてくれ。こちらからなにか手をうつ、ということができないから困るが、当分はこのまま見ているよりほかないな」

そして、あくる日から鳴海も多恵も気をつけたが、天野久一は見かけなかった。

多恵がつぎに天野久一を見かけたのは、それから一週間後だった。正午ちょっとすぎに、鳴海が館長室から資料室にはいつてきて、井村になにか用を言いつけた。井村が出て行ったとき、門のところに立っているよ、と鳴海が言った。

「あわてるんではないよ。十一時半からあそこに立っている。なかには入ってこないらしい」

そして鳴海はすぐ館長室に引きかえした。

多恵が窓から門の方をみたら、天野久一が空をみあげて立っていた。ああ、いやだ、と思ったとき、天野久一がこっちを見た。多恵は思わずしゃがみこんだ。門までは八十メートルほど距離

があり、彼にみられたとは思わなかったが、いやな一瞬だった。そつと顔をあげてみたら、彼はこんどはこちらに背中をみせて立っていた。

多恵は館長室に行き、わたくしが出てくるのを待っているのでしょうか、ときいてみた。

「そうかしら思えないが、しかしそれなら閉館のときに待つのが当然だ。この前もああして昼間あそこにいたが、閉館時にはいなかった。とにかく僕は食事に行ってくるよ」

鳴海がでて行き、それからしばらくして多恵も控室に昼食をとりに行った。そして早目に食事をすませて資料室に戻ったのが十二時四十分だった。窓から門をみたら、天野久一の姿は見えなかった。ほっとしながら、しかし明日もまた門の前に現れるかもしれない、と考えると、いやな気持ちになってきた。

閉館時に門の方をみたが、姿は見えなかった。この日の夜、なんだろう、と鳴海と話があった。もうすこし様子をみよう、と鳴海は言った。

この日から九日目の夕方、多恵は美術館をひけて仲間といっしょに近鉄奈良駅の前にでた。この日は西大寺のショッピングセンターがやすみだったので、奈良市内で買物をすませる予定だった。あれいらい天野久一が姿をみせないので安心していた面もあった。

買物をすませて駅におりようとしたとき、階段の下に立っている天野久一をみたのである。いそいで踵を返し、タクシーに乗った。

鳴海はつぎのように説明した。

「あの駅から乗るところを見られたんだな。どこで降りたか、それに気づかなかった。あるいは、あの駅から降りるところを見られた。だから、帰りもあの駅から乗るだろう、と考えたのだろう。閉館時に美術館の前で待てば確実だが、しかし美術館の仲間がいっしょだから声をかけられない。そういう気の弱さがある男だとは思えない。とすると、夕方にいつもあの駅で待っていた、と

考えられる。そして更に考えられるのは、このマンションが知られていないということだ。御両親が松阪の人達と奈良にきたことがあったね。そのとき、多恵ちゃんがこのマンションにいることを、御両親は松阪の人達には隠していたのではないかな」

「ちょっと信楽に電話をしてきいてみましょうか」

「いや、かえって心配をかけることになる。もしこのマンションがわかっていたら、駅で待たずにマンションの入口で待っているはずだ。すると、バスで通いだした最初の案が賢明だったわけだ」

それから今日まで天野久一の姿はみかけなかった。

風がないので雨はまっすぐ降っていた。

もし明日も雨ならどこにもでかけず酒でものもう、と前夜鳴海は言っていた。生活の場を見つけたこのふるいまちに黒いものがよぎって行く……あの黒いものを取りはらうことはできないだろうか。

部屋に戻り、朝食の支度にとりかかった。

味噌汁をつくる鍋に水を張ってガス台にかけ、鰹節を削っていたら、雨か、とうしろで鳴海の声がした。

「もうすこしおやすみになればよろしいのに」

「いや、目がさめた。やはり出かけるとするか」

「あら、どちらへ」

「花背に、はやい夕飯を食いに行くとしよう」

「花背って、京都の花背」

「そうだ。山菜料理のおいしいのを食べさせてくれるところがある」

「峰定寺の山門前の〈奥山莊〉でしょう」

「なんだ、知っているのか」

「行ったことはないんです。父がなんとか行っておりましたので」

「ついてくるか」

「はい、おとします」

「ここを二時にでると花背には四時につくだらう。六時までに夕飯をすませ、帰ってくると八時になるな」

「おともしてもよろしいのかしら」

「なにかためらいがあるのか」

「いいえ。神戸に行ってきたときから、なにか刃物の上を歩いている感じがするんです」

「怖いのか」

「いいえ」

「では刃物の上を歩こうじゃないか」

「先生、ほんとにいっしょに歩いてよろしいの」

「いやなら置いてきぼりにしようか」

「すらすらとそんなことをおっしゃるのだから、あなた、怖いひとよ」

「花背ではいま天魚あまこを食べさせてくれるだらう。では、雨のなかを花背行としよう」

それから朝食をすませ、鳴海が自分の部屋に引きあげてから、多恵はかんたんな洗濯物をした。それから下駄をだし、爪掛をとりかえた。

西大寺をでたのは二時をすこし過ぎていた。

京都駅の八条口からタクシーで花背に向ったが、鞍馬をぬけ花背峠を越えたあたりから雨の量

がふえてきた。

「山を越えたら大雨になったわ」

「京都の天気は変りやすいからな」

峠をおりたら、道沿いの流れの上で雨脚が飛沫を散らしていた。

「天魚が泳いでいるな」

「どこですか」

「あそこだ」

多恵は掌でくちを押え笑いをこらえた。ときたま、こちらが信じてしまうような冗談をいうことがあり、しばらくたってから冗談だとわかるのであった。

奥山荘についたとき雨は小止みになっていた。車からおりたら、いきなり流れの音がきこえてきた。

「あら、この音、久しぶりだわ」

多恵は流れのそばに歩いて行つた。降り続いたので水は濁っていたが、水量が多かった。流れのむかい側は急斜面の杉林で、頂上の方は霧がかかっていた。雨後の濡れた風景が日本画になっていた。

「こんなに水嵩が増し流れが速いと、魚が下流の方に流されてしまわないかね」

鳴海は出迎えにきた亭主にきいた。

「大丈夫でございます」

「鮎にはすこし間があるね」

「はい。七月初旬になりませんと」

案内されて二人は部屋に上がった。

部屋から流れの向うの杉林がみえる。反対の北側は雑木林の崖で、小さな庭の池に水が落ちていた。

「ここにはよくいらっしやいますの」

「年に二度はくる。今年をはじめてだ。ここは雪が深いので、十二月から三月までは休むが、春は山菜、夏は鮎、秋は茸とまことにいろいろどりが豊かだ」

「流れの音がするのがうれしいわ」

「それはよかった」

考えてみたら、この花背にはもう五年通っていた。前年は五月と十一月にきたが、十一月は、妻とのあいだが毀れた直後だったので、酒がことのほか滲みたことを憶えている。

おかみが酒を運んできた。

「この子は信楽の石本八郎さんの娘さんだ」

鳴海は多恵を紹介した。

「あら、さようでございますか。たしか、松阪の方に……」

「事情があつて戻ってきたらしい。いま、うちの美術館に勤めている」

「さようでございましたか」

おかみは多くをきかず、運転手さんには軽い食事をだしておくようにします、と言って出て行った。

「身元をあかしたのでびっくりしたろう」

「いいえ」

「ここへはまた連れてくるつもりだ。したがって素性の知れない女では困る。美術館員ならいっしょでも不思議ではない」

外はまた雨粒が大きくなっていた。

一時間半ほどかかって食事をすませ、帰路についた。

多恵のなかで流れの音が残っていた。いまごろは信楽の川も水がゆたかだろう。

「八月のやすみにどこに連れて行ってやろうか」

京都から西大寺行の電車に乗ったとき鳴海がきいた。

「どこでもいいのです」

「韓国はどうだね」

「韓国……」

多恵はびっくりして鳴海をみた。

「大阪からだ」と飛行機で一時間の近さだ。美術館をまわってこようじゃないか」

「先生は、もう、なんども」

「二度訪ねている。はじめは五年前の春だった。つぎは一昨年の秋。東洋陶磁学会を知っているか」

「はい」

「一昨年の学会の例会を大和文華館で開催したが、そのときの会の主題が李朝だね、そこで向うの美術館長を三人招いた。夏だったが。そうしたら秋に韓国にこないか、と招かれた。僕の他に二人いたが。美しい国だ。行くか」

「はい、おとします」

「慶州は奈良の原形といってもよいまちだ。私的な旅行だから、ともに美を語りあえる向うの友人には会えないが、澄んだ韓国の空を眺めてこよう。旅券を申請しておかねばいかな。あのね、戸籍抄本と住民票をとっておいてくれ。あとは旅行業者にまかせるから」

「先生は」

「僕は数次旅券がまだ二年残っている」

電車の外はもう夜にはいつていた。

マンションにいたら、管理人が、夕方お母さんがいらしたので、マスターキーでお部屋に案内しておきました、と知らせてくれた。部屋はきちんとかたづけられてあったが、鳴海のおいは残っていないだろうか、とちょっと心配になった。

「では、また明日。朝食は心配せずともよい」

エレベーターが四階でとまったとき鳴海が言った。

部屋にはいたら、母はテレビをみていた。

「夕飯はどうしたの」

「残りものがあつたから、それですませたわ」

「電話くらいくださればよいのに」

「二時頃電話をしたのよ。出てこないんだもの。それで思いきってやってきたのよ。ちょっと話があつてね」

母は遠慮したくちぶりだった。

一升壺や徳久利、それに使いならした鳴海の箸、灰皿などをみられたと思った。押入をあければ鳴海の寝巻もはいつていた。そんなことを考えると、無断ではいつてきた母に腹がたつてきた。

「お母さん、みたでしょう」

多恵は覚悟をきめてきいた。

「なにを」

「娘の部屋を。……押入のなかもみたでしょう」

「悪いと思っただけど、みたわ」

「しょうがない人ねえ。それより、なんの話なの」

「怒るかもしれないけど、小川さんが、あなたの再婚話を持ってきたのよ。松阪のことは自分の責任だから、なんとか多恵ちゃんを幸福にしてあげたいと……」

「よけいなお世話というものですよ」

「だって、久一さん、いま、奈良にいますというじゃないの」

それから母は、茶を淹れましょう、と言いながらたちあがった。

「いいわ、わたくしが淹れるから」

みんなが知っているのなら話は別だったが、人にかくれて男と生活している部屋を勝手にいじられるのはいやだった。

「久一さん、美術館に訪ねてこなかったの」

「こないけど、なんか見かけたわ」

多恵は茶を淹れてきてから、天野久一を見かけた話をした。

「小川さん、それを心配しているのよ。あなたのいる家を教えてくれといってきたそうだけど、小川さん、教えなかったそうよ。とにかく話だけ聞いてちょうだい。小川さん、酒の間屋さんでしよう。あちこちにお店を持っているけど、彦根の店をまかせている徒弟が、去年の春、つれあいをなくして、子供さんが二人いるんだけど、来年は独立させるつもりだって。その人にどうか、と言ってきたのよ。四十六歳で真面目な人だそうだけど」

「お母さん、どうしてそんな話をここに持ってくるの。当分そっとしておいてもらいたいとこのあいだも頼んだはずよ」

「それはそうだけど……」